研究ノート

演奏表現を考える

ドビュッシー「喜びの島」

池田　京子

姫路日ノ本短期大学　　〒679-2151 兵庫県姫路市香寺町香呂 890 番地

From my study notebook

I am thinking about piano performance expressions

“L’isle joyeuse” by Debussy

Kyouko Ikeda

Himeji-Hinomoto College, 890 Koro Kodera-Cho, Himeji-City 679-2151, Japan

１、はじめに

音楽を演奏するうえで表現は欠かせない。

世俗音楽を除いて、バロック時代の音楽は宗教との結びつきが強く、神をあがめ、賛美するために書かれた作品が数多く残されている。ヘンデルの「メサイヤ」やＪ．Ｓ．バッハのカンタータ１４７番などは、その代表的な作品である。

その後は、宮廷などのお抱え音楽家として、皇族や貴族といった、いわゆる「王様」のために音楽が用いられることが一般的であった。しかし古典派も後期になると、作曲家は宮廷から独立し、貧しい暮らしを強いられても自らの芸術を貫こうとしていった。

このような音楽の歴史を考えると、古典派後期以降の作品が、時代によって変化していくことも、ごく自然な流れとして捉えられる。例えば、神話や伝説、物語などの文学作品を題材に、「現実にはない架空の世界」が音楽で描かれたり、風景を描写するように「目に見える世界」が描かれたり、さらには、社会情勢でさえも音楽に反映して、目の前にある現実に対する人の思い、社会への問いかけというような、「目には見えないが、心の中には存在するもの」が音楽で描かれたりするようになっていくのである。

筆者は、主にロマン派以降、特に、近・現代の音楽について、「楽譜は作曲家が書いた台本」であり、演奏者は「楽譜という台本から作者の意図を読み取って演じる俳優のようなもの」だと考えている。作曲家が何を見たのか、何を感じたのか、何を表現しようとしたのかなどを考えることは、非常に大切である。

ドビュッシーの音楽は「絵画的」であるといわれ、筆者も作品に描かれている風景を想像しやすいと感じることが多い。それは、

姫路日ノ本短期大学　講師

千蔵八郎氏の著書「音楽史＜作曲家とその作品＞」に『もし、ショパンを＜音の詩人＞というのと同じ例えをドビュッシーに適用するとしたら、＜音の画家＞と言ってもいいのではないだろうか。しかも、耳で聴いたものをそのまま音楽にかき現した画家だったのである。※引用１』と記されているように、曲の題材となる風景の情景が、ドビュッシーの音楽の中で的確に描かれているからであろう。それも風の音や波の音というような、その姿が絶えず変化していく風景、いわば「動く風景」が題材なのである。

また、ドビュッシーは「水の風景」を題材にした作品を数多く残しており、「喜びの島」もその一つである。

この研究ノートでは、様々な出版社の楽譜を参考に、筆者がこの作品の中に見た風景を記述する。

２．「喜びの島」作品について

この曲は、伝説の島「愛のヴィーナス島」を目指して船で旅立っていく様子が描かれたジャン・アントワーヌ・ヴァトーの絵画「シテール島への船出」をもとに作曲されたといわれている。

この曲が作曲された１９０４年、ドビュッシーは妻とは別の女性、エンマ・バルダックと駆け落ちし、社会に大きな恋愛スキャンダルとして取り上げられた。これについて、ジェルメーヌ・ムニエ監修、山崎孝校訂「ドビュッシーピアノ作品集⑥の巻末解説＜ドビュッシーの生涯とピアノ作品＞には、山崎孝氏によって次のように記されている。

『ドビュッシーは、前年の１９０３年にレジオン・ド・ヌール勲章を受賞しフランス音楽界に確固たる地位を築いていただけに、騒ぎは大きくなり、この事件を題材としたモデル小説まで作られた。

ヴァトー「シテール島への船出」／出典：Earl Art Gallery（Ｗｅｂ）より

この事件は、《ペレアス》の成功から新境地を切り開こうと苦闘していたドビュッシーにとって大きな痛手となり、彼は多くの友達を失うことになった。※引用２』

これほど大きなスキャンダルとして世間で扱われてしまったことは、ドビュッシーにとって大きな誤算だったに違いない。勿論、ドビュッシーのこのような愛は、罪として、決して見過ごされるものではないが、伝説の島、愛のヴィーナス島である「喜びの島」に辿り着きたいと願ったのは、誰よりもドビュッシー自身だったのかも知れない。

絵画「シテール島への船出」では、何組ものカップルが「愛のヴィーナス島」に向かう船に乗り込んでいく様子が描かれている。

船では愛のキューピットたちが無邪気に戯れており、まるで、愛の成就を願う人々を誘っているかのように描かれている。また、船に乗り込もうとするカップルたちの姿はカラフルな衣装で生き生きと描かれており、絵画全体の色合いとも相まって、これから愛の楽園に旅立てるというカップルたちの喜びにあふれる気持ちが、いまにも伝わってきそうである。

ドビュッシー「喜びの島」でも、絵画作品と同じ情景を描いているとされる解説があるが、筆者は、絵画作品に描かれた情景に始まって、船がヴィーナス島に向かって海の上を航海していく様子が、ドビュッシーの想像によって描かれていると考えている。なぜなら、海の水や風の様子が、作品の音やリズムのって伝わってくるからである。

勿論、「喜びの島」に別の情景を思い描くことも十分に可能であり、演奏者の自由な描写に委ねられる。演奏表現を考えるうえで、この記述も一つの情景として、参考にしていただければ幸いである。

３、演奏表現

「喜びの島」に描かれた情景を考える

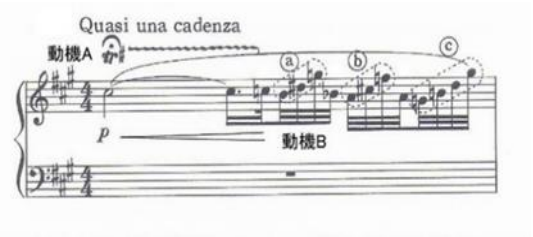
1小節～6小節　　＜譜例１＞

この曲の冒頭はトリラから始まる。そのトリラにはフェルマーターが付けられ、規定の長さより長く、ほどよい長さで演奏することが求められている。

次に、３２分音符の動きを交えながら、４小節目以降、右手の音域を１オクターブ下げて同じ事が繰り返される。

指示記号により、１小節目～６小節目の間はカデンツァのように自由に演奏することが求められている。

譜例１



いかにも、出発間際の船が「帆を上げるぞ～！！」と合図しているような情景を思い浮かべることが出来、ワクワクする気持ちを伴った緊張感を感じずにはいられない。

また、２拍よりも長めに演奏されるトリラと３２分音符の素早い動きの組み合わせは、トリラでは、視界の向こうからこちらに波がやってくる様子、３２分音符の動きは、打ち寄せられて船にぶつかった波が、あちらこちらで小さな水しぶきを忙しそうに上げながら消えていく様子が想像される。

さらに、３２分音符が分散和音の形式で、それぞれの最初の音が、Ｈ－Ａ－Ｇと順番に平行に下降していることから、小さな水しぶきが、さらに少しずつ小さくなっていき、最後にピチャっと音を立てながら消えていく様子も伺える。

天気は晴れ。自由な演奏を求められていることから、打ち寄せる波や水しぶきは必ずしも規則的ではないと思われる。

このトリラを動機Ａとし、３２分音符を動機Ｂとする。

7小節～8小節

右手には、まだトリラが続いている。この小説から左手にハバネラのリズムが投入される。（譜例２　左手参照）

ハバネラは、もともとはキューバの舞曲であったが、スペインには船乗りによって伝えられたといわれている。フランスでは、ビゼーの「カルメン」はじめ、サンサーンスやラヴェルもハバネラを使った有名な作品を残している。「喜びの島」が書かれた１９０４年頃もまた、フランスのクラシック音楽界で人気のリズムであった。

指示記号により、テンポでほどよく柔軟に演奏することが求められている。

これらのことから、７～８小節目では、いよいよ船がゆっくりと動き出したという、胸が高鳴ってドキドキするような緊張感を感じずにはいられない。聴衆にとって、これから「喜びの島」の物語の始まりを期待させる２小節になるであろうと、筆者は考える。

9小節～11小節　　＜譜例２＞

この小節からは、左手のハバネラのリズムにのって、いよいよ右手の旋律にテーマが登場する。このテーマは、１～２拍目に現れる付点のリズムと３～４拍目に現れる三連符から構成される。

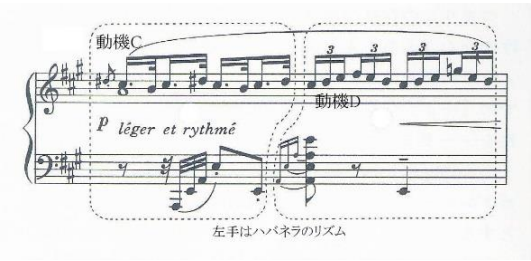
前半の付点から成る部分を動機Ｃとし、後半の三連符から成る部分を動機Ｄとする。

指示記号により、軽やかでリズミカルに演奏することが求められているが、これまでの序奏とは違って、テンポ（拍子感）は正確に守らなければならない。テンポが不安定になれば、付点のリズムを生かせず、動機Ａの付点のリズムと動機Ｂの三連符リズムとの違いが曖昧になるからである。

ところで、日本で付点のリズムに代表される童謡に「あめふり」の「ピッチピッチ・チャップチャップ・ランランラン」が挙げられる。付点のリズムは、跳ねるような動きを表現するのに、最も理にかなった方法であることを童謡「あめふり」は証明しているのではないだろうか。

「喜びの島」は、この箇所で、乗船客たちの踊るような心の動きとともに、海の水でさえも愛のヴィーナス島行きを歓迎してくれているかのような、そのような水の動きを表現していると、筆者は考える。また同時に、チャップチャップと小さな音をたてる波、水面に幾つもの小さな山を作りながら流れていく波の様子が、動機Ｃ、動機Ｄによって表現されていると考える。

譜例２

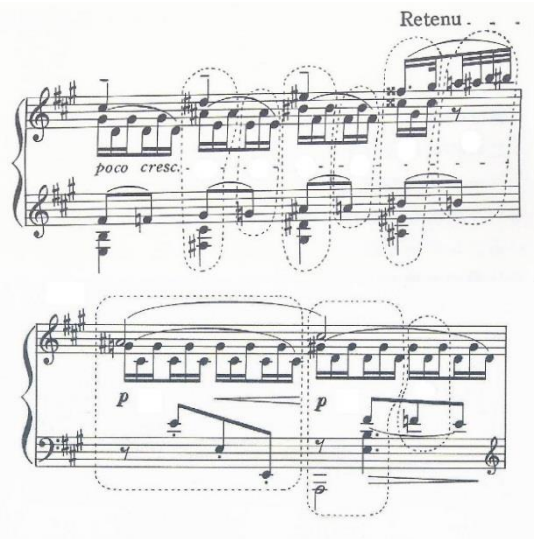


１２小節目～２４小節目　　＜譜例３＞

右手の三連符の形が、１１小節目までの音階的な形から、跳躍の形へと変化する。左手は、跳躍や下降する音形である。

この小節の三連符は、動機Ｂの三連符に代表されるように、やはり、海の波の動きや、波の流れを表していると考えるのが、筆者にとっては自然である。しかし、これまでとは水の様子が少し異なり、時折、波の間隔が縮まったり、あるいは風によって激しくなったりする情景を想像する。そうすれば、１４小節目でメロディーやハーモニーの周期が、それまでの２拍から１拍に短縮され、全音音階的に上昇した挙句、最後にリテヌートが加えられていることにも自然にうなずけるからである。

譜例３

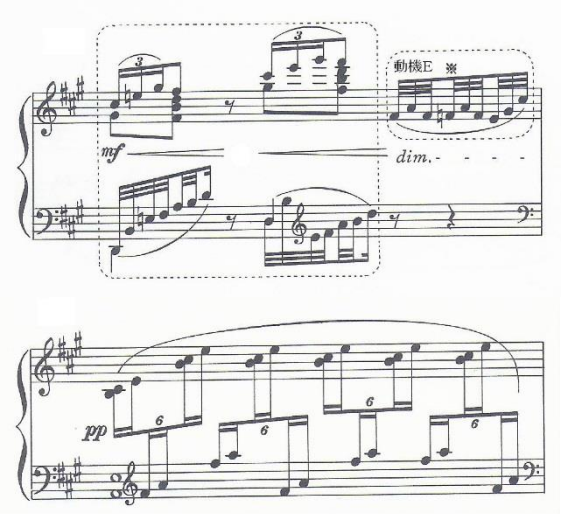


その後１５小節目で、７小節目からと同じ速さに戻ってテーマが繰り返され、変形しながら音楽が進んでいく。

２５小節～２７小節　　＜譜例４＞

２５小節目に登場するアルペジオでは、わずか１拍の間に左手が２オクターブ上昇する。下から上に、勢いよく一気に駆け上がっていくように演奏する箇所である。そして、２拍目の後半から３拍目には、第二のテーマを予告するような旋律が表れ（動機Ｅ）、２６小節目では、ピアニッシモでの演奏を指示する強弱記号のもと、五音音階のアルペジオが現れる。

譜例４



大きな波がザブーンと音を立てながら押し寄せたら次の瞬間、海は何事もなかったかのように静まり返る、そのような光景が音やリズムで見事に表現されていると考えずにはいられない。

２８小節～５１小節　　＜譜例５＞

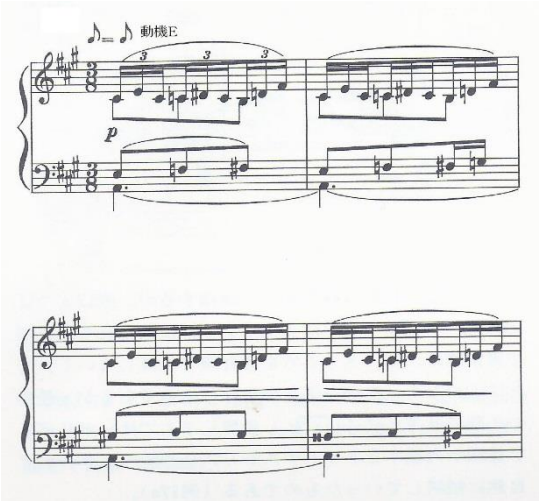
２５小節目に登場した動機Ｅによるテーマが、２８小節目から本格的に用いられる。右手、左手ともに、８分音符は比較的狭い音域の中で移動する。

３６小節目になると、右手の１６分音符の３連符に加えて、左手にも１６分音符が現れ、穏やかな海で水が微妙に変化していく様子を感じとることが出来る。例えば、水

の表面とその下層部とで流れる速さや方向が違ったり、光に照らされた時の水の模様を立体的に眺められたりする時の様子である。海を泳ぐ魚の群れも、船で乗客とともに旅する愛のキューピットたちも、きっと楽しそうに戯れているに違いない。

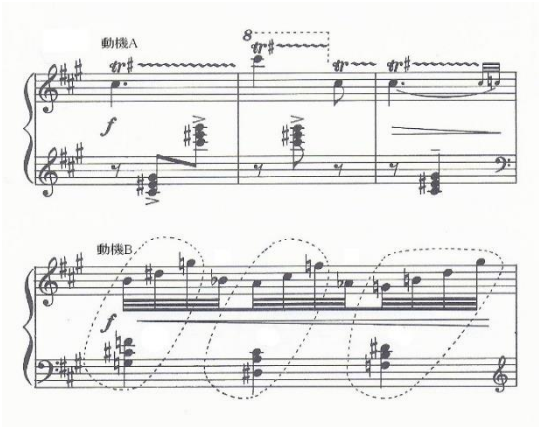
この箇所で表現される波は規則的であると、筆者は考える。

譜例５



５２小節～６６小節　　＜譜例６＞

譜例６



この箇所では、動機Ａ、動機Ｂ、動機Ｃ、動機Ｄが全て順に現れる。（動機Ａ、動機Ｂは譜例参照。）１小節目からと１０小節目からの再現である。

そして６７小節に入っていく。

６７小節～９８小節　　＜譜例７＞

この箇所は左手が５連符で書かれている。５連符を３拍で弾かなければならず、非常に演奏しにくい箇所の一つである。

右手には「喜びの島」を思わせる美しい音楽が登場する。この右手を動機Ｆとする。

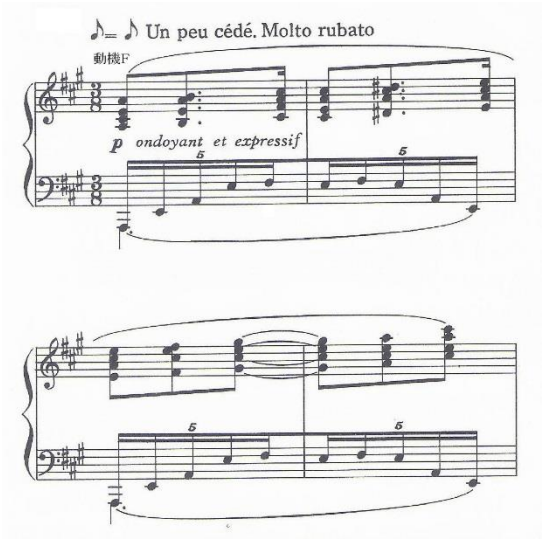
指示記号により、波に揺れるように表情豊かに演奏することが求められている。

さて、ドビュッシーがここで５連符を使って表現しようとしたことは何だろうか。

一つは、不安である。例えば、遠く離れた島にいつ辿り着けるのかという不安、あるいは、今のこの幸せがいつまで続くのかという不安である。

もう一つは、割り切れないほどの大きな力である。それは、人間には決して理解出来ない、計り知れない力である。ここでは、海という、自然の大きな包容力や、神の力、それも愛を司る神の、心を包み込むような大きな力が表現されているのではないかと、考えられる。

譜例７



「喜びの島」を思わせる美しい旋律は、「何も心配しなくていい。このまま愛の楽園に行こう…。」と、やさしく囁きかけているようである。もしかしたら、ドビュッシーは、穏やかな海のうえで、愛の神様のそのような微笑みを感じたのかも知れない。

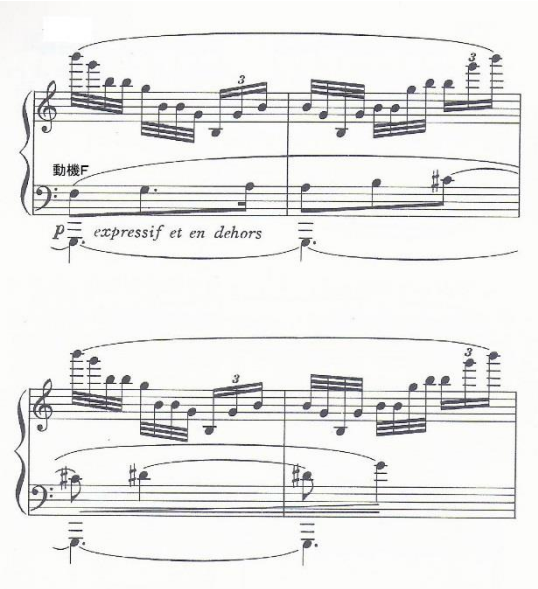
大きな周期で穏やかにやってくる波の様子が伺える。

９５小節目から、左手の５連符は１６分音符に変化し、９９小節目に入っていく。

９９小節～１４０小節　　＜譜例８、９＞

ここからは、３２分音符で音域の広いアルペジオが現れる。そのアルペジオを続けながら、左手に動機Ｃ、動機Ｄが現れる。

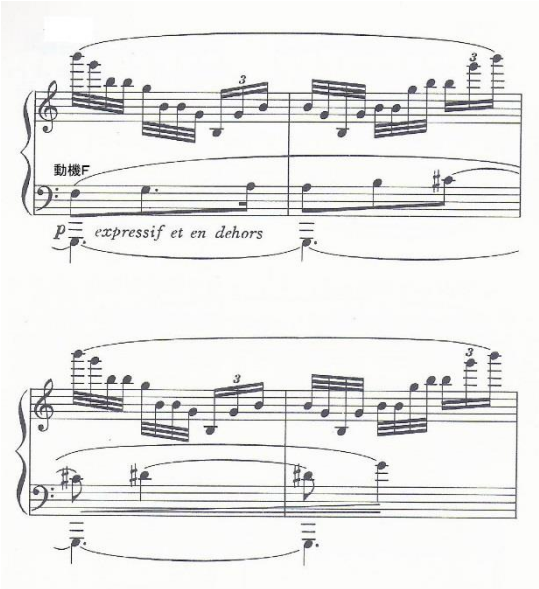
譜例８



１１７小節目からは、左手に動機Ｆが登場する。時折、一拍周期のアルペジオが１６分音符で投入され、後では１３３小節目から１４０小節まで続く。

清らかな水がどこからともなく湧き溢れ出てくるような光景が筆者には想像出来る。

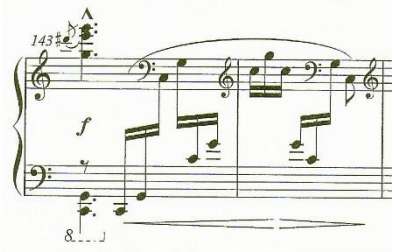
譜例９



１４１小節～１４４小節　＜譜例１０＞

この４小節は、１６分音符の３連符を軸とした非常に広い音域のアルペジオが２小節の周期で現れる。１拍目は力強い和音で、その後、一気に駆け上がって駆け降りるのである。

譜例１０



遠くにではあるが、喜びの島がいよいよ確認できたのかもしれない。

この辺りから最後に向かって、力強い音楽の表現が増えていく。

１４５小節～１５９小節

１６分音符の三連符が続くなかで、動機Ｃ、動機Ｄに続いて動機Ｅが現れ、やがて、

動機Ｅはシンコペーションに変えられる。

１５８小節２拍目から一気に低音部へと移動していき、１５９小節目では、左右共に１６分音符の力強いオクターブが現れ、さらに下降しながら小休止となる。フォルテの指示があり、さらに、小休止の直前の音には左右共にアクセントが付けられている。実際に演奏すると、突然、音が消え、直前の和音の余韻を無意識に探してしまう箇所である。

そして１６０小節に入っていく。

明らかに、今までとは違う何かが起こった場面である。まるで、目的地である「喜びの島」を肉眼ではっきりと確認出来たとでもいうような、固い決意とも取れる表現がなされている箇所である。

１６０小節～１８１小節

この小節からは、指示記号により、より生き生きと少し速めに演奏することが求められている。右手には動機Ｃ、動機Ｄが現れるが、左手は完全５度でオクターブずつ上がっていく和音をスタッカートで軽やかに演奏する。

続いて、１６６小節目から動機Ｄの反行形ともいえる右手の旋律に、動機Ｅが左手で加わる。

「生き生きと軽やかに」ともなれば、これまでにも増してウキウキした気分で航海が続けられているような情景を想像出来る。さらに、これが１６０小節の直前の小休止の後である。

明らかに、以前とは情景が変化している。

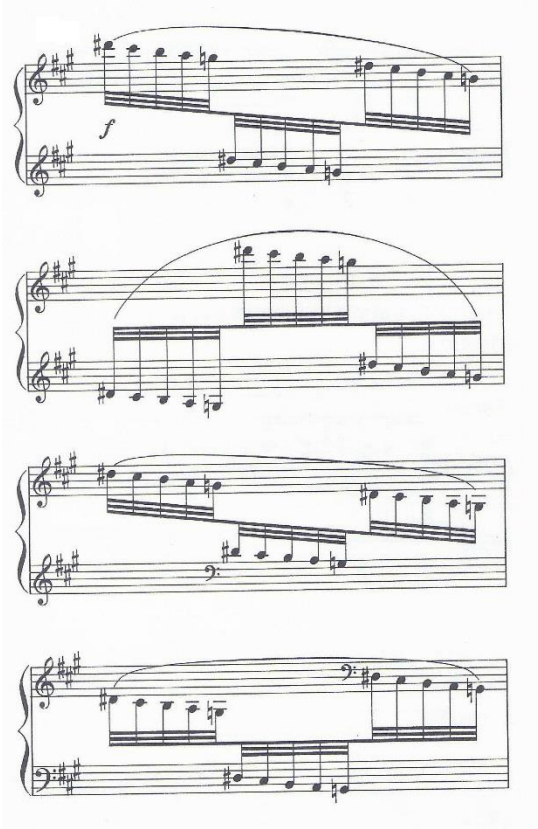
１８２小節～１８５小節　　＜譜例１１＞

４小節に渡って、３２分音符で高音から低音まで、一気に音が下降していく。

まるで、海を照らす太陽の光によって、一瞬のうちに海がキラキラと輝き始めたかのような描写である。

こういう箇所こそ、透明感のある輝きに満ちた音で演奏したいものである。

譜例１１

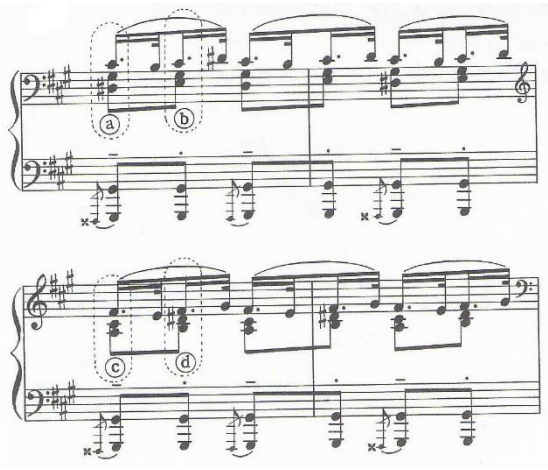


１８６小節～　　＜譜例１２＞

左手で、和音をスタッカートで演奏しながら、右手に動機Ｃが現れる。

左手の和音は、１８６小節目から１９１小節目までは装飾音が加えられ、３拍子の譜面の中で、２拍子的に演奏することが求められている。装飾音入りのオクターブの和音には全てテヌートが記され、装飾音のないオクターブの和音にはスタッカートが記されている。

譜例１２



これほどまでに細かい指示がなされていながらピアニッシモでの演奏が求められており、この箇所の左手の演奏にはより神経を使う必要がある。技術的にも簡単ではないが、特に左手の和音の表情が重くならないよう、緊張感を保てる演奏が必要になってくる。

「喜びの島」という目的地の存在が、これまで曖昧であったのに対して、いよいよ目的地を確信でき、決心を持って進んで行こうとしている光景が、筆者には目に浮かんでくるようである。

２００小節～２１９小節

左右同じリズムでの和音が４小節続く。その後は、動機Ｄと動機Ｅが組み合わされて登場する。華やかに、そして音楽が次の方向に向かっていくように演奏する。

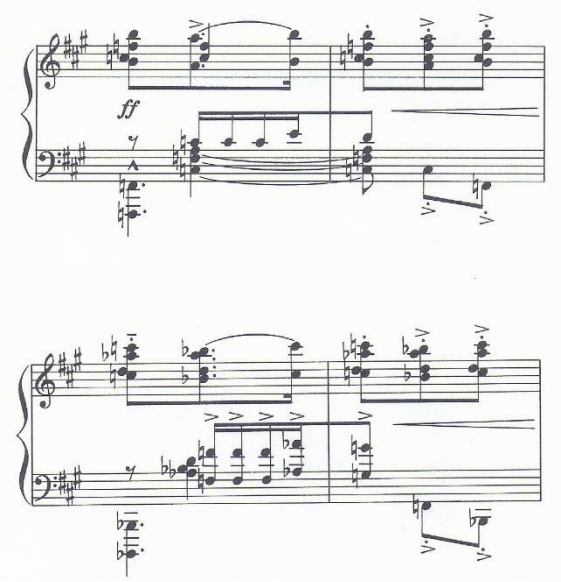
喜びの島が目の前に迫ってきたという状況で、抑えられないほどに気分が高揚していく様子が伺える。

２２０小節～２４３小節　　＜譜例１３＞

右手に動機Ｆが現れる。

力強く、華やかに、そして、輝くように演奏したい場所である。

譜例１３



なぜなら「喜びの島」に到着して人々が愛と喜びに沸き上がり、興奮しているような光景が手に取るように伝わってくるからである。さらに、２４小節もこのような場面が続き、ただの喜びではないことが容易に理解出来るからである。

２４４小節～

この曲の最初と同じ形で、動機Ａに該当するトリラや動機Ｂに該当する３２分音符が現れ、左手は１小節の周期で、上昇が繰り返される。和音のトリラの後、今度は一気に音が下降して、この曲の終わりを迎える。

３、終わりに

この研究ノートでは、楽譜から読み取れる情景に対する記述を中心とした。

音楽之友社が発行する「はじめての音楽史」の中には、ドビュッシーの音楽について、長野俊樹氏によって次のように記され

ている。

『ドビュッシーの音楽はきわめて微妙なニュアンスにあふれている。彼の音楽を理解するためには、伝統的な理論によりかからず自分の感受性をとぎすませて、瞬間瞬間に生まれては消える音響の表情をとらえつづけることが必要である。※引用３』

作品から感じる情景をはっきりと具体的に思い描くことが出来れば、それをどんな音色で演奏すべきかを考えながら作品に向き合うことが出来る。それは、演奏表現を考えるうえで、非常に大切な作業である。

今後、さらに研究を深めていきたい。

２０１９年１２月２７日

池田　京子

＜本文譜例＞

ドビュッシー　喜びの島

松平頼則解説　全音楽譜出版社

ドビュシーピアノ作品集６

G.ムニエ監修 山崎 孝校訂 音楽之友社

＜本文引用文献＞

※引用１

音楽史＜作曲家とその作品＞

千蔵八郎著　株式会社教育芸術社

※引用２

ドビュシーピアノ作品集６

G.ムニエ監修 山崎 孝校訂 音楽之友社

※引用３

はじめての音楽史―古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで

久保田慶一、片桐功、須貝静直、岸啓子

長野俊樹、白石美雪ほか著　音楽之友社

＜参考文献＞

L’isle joyeuse　デュラン社

ドビュシーピアノ曲集４

安川和子校註　音楽之友社

ドビュシーピアノ作品集６

G.ムニエ監修　山崎孝校訂　音楽之友社

ドビュシーピアノ作品全集６

中井正子校訂　ハンナ

ドビュッシー集２

井口基成編集・校訂　春秋社

癒しのドビュッシー

後藤丹解説　全音楽譜出版社

ドビュッシー　喜びの島

松平頼則解説　全音楽譜出版社

名曲解説全集１２　音楽之友社

最新名曲解説全集１６　音楽之友社

ドビュッシーのピアノ作品

E・ロバート・シュッツ著　大場哉子訳

全音楽譜出版社

音楽史（作曲家とその作品）

千蔵八郎著　株式会社教育芸術社

はじめての音楽史―古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで

久保田慶一、片桐功、須貝静直、岸啓子

長野俊樹、白石美雪ほか著　音楽之友社

＜本文絵画＞

PC Web：Earl Art Gallery　より

西洋美術史年表＞ロココ＞ヴァトー

http://arts.moo.jp/W/Watteau/z001.htm

＜参考絵画＞

PC Web：美術館 collection より

トップページ＞作家＞画家＞フランスの画家＞アントワーヌ・ヴァトー

http://art.xtone.jp/artist/archives/antoine-watteau.html